

平成二十九年 入学選考試験 国語 「特待生入試」

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① ショウミンのことはさておき、一部の文化的エリート層に話を限定して、オングは、ギリシア文明において書字文化が成立し印刷術の発明によってそれが② ヒヤク的に発展した西欧社会を「文字の文化」と呼び、「声の文化」との対立を強調した。声の文化に基づく思考と表現の特徴が、「累加的、統合的、③ 冗長、伝統主義的、具体的、闘技的、参加的（感情移入的）、呪術的」であるのに対し、文字の文化は「因果的、分析的、効率的、実存的、孤立的（個人主義的）、抽象的、非参加的」であり、それが西欧的思考法の基礎を形作った。それが今、電話、ラジオ、テレビ、録音テープといったエレクトロニクス技術の進展により、「第二次声の文化」に移行しつつあると彼は言う。第二次声の文化は第一次声の文化と驚くほど似ており、「人々が参加して一体化するという神秘性を持ち、共有的な感覚をめぐくみ、現在の瞬間を重んじ」、強い集団意識を生み出した。しかも、かつての声の文化より意識的であり、また集団規模は地球規模にまで拡大しつつあるという。

とりあえずここでは、オングのいうように「声の文化」と「文字の文化」とに思考法的相違があるとしよう。その場合、おそらくラジオの発展、電話、テレビの普及初期までは「第二次声の文化」と呼ぶにふさわしい文化的側面がたしかに垣間見えた。ラジオから流れる為政者の演説、熱狂するアナウンサーのスポーツ中継に人々は文字どおり群をなして聴き入った。そこには疑いなく「闘技的・参加的」零囲気があり、人々が全身を耳にして音の世界に④ ポツニューウしたことが容易に想像される。しかし、⑤ テレビの普及の完了とビデオの登場は、再び声の文化から人々を遠ざけた。

テレビは視覚・聴覚に訴える元祖マルチメディアであり、その情報処理に動員される感覚器官の状態からすれば対面状況にかなり近い。しかし、対面との決定的な違いは、相互行為性の欠如と非対称性であり、また聴覚情報に対する視覚情報の優位性である。前者についてはあらためて⑥ ショウジュツするまでもないが、相互のやりとりによってディスコースを共同製作するという以外に、対面では常に相手の視線に監視されることによつて、よき聞き手であることを義務づけられており、たとえば⑦ 領きはその確認手段の一つだということに注意せねばならない。逆にいえば、⑧ そのモニタリングが欠如しているからこそ、テレビ視聴は安易な時間つぶしとなりうる。⑨ テレビ視聴における視覚情報の優位性については、認知心理学やマス・コミュニケーション研究の領域でいくつかの⑩ チケンがある。人間が一時に処理しうる情報量には限りがあり、とくにメディアからの情報が多彩である場合には映像情報の処理が優先される傾向にある。この傾向は乳児の時点でも既に確認されており、乳幼児期におけるメディア体験はその人のその後の認知態度に影響を及ぼす可能性が大きい。いわゆる映像型人間の登場である。わけてもテレビから流される情報密度は、(その人の生活的価値という側面では) けつして濃いはいえない。音声を伴ってはいても、⑪ テレビを中心として形作られる文化は、声の文化とかなり様相を異にするはずであり、少なくとも「聞く」姿勢には決定的な差異がある。

※オング：一九二二年～二〇〇三年。アメリカの古典学者、英語学者

※ディスコース：会話。言葉によって思いを伝えること

問一 波線部①～③のカタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 傍線部①の意味を答えなさい。

問三 傍線部②とあるが、なぜ人々は声の文化から遠ざかったのか。その説明として合致するものには○を、合致しないものには×を使って答えなさい。

ア 特定の時間を人々と共有しているという意識が薄れたから。

イ 集団で時間を共有して一台のテレビを見なくなったから。

ウ テレビから得られる情報が多彩になりすぎたから。

エ 音声や映像の編集によって情報量が少なくなったから。

問四 傍線部③が指す内容を文中より十五字で抜き出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問五 傍線部④とあるが、この原因についての見解として挙げられていることを説明しなさい。

問六 傍線部⑤とあるが、どのような点が異なっているのか。わかりやすく説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

西洋の宇宙観が人間中心の考え方となり、そのなかでもとくに人間理性への①シンボウは一七世紀以後今日まで、人間をも含むすべてのものを客観的対象としてあつかい、分析することによって、自然科学と技術を発展させてきた。また逆に、科学技術の目ざましい成果と社会への影響が、ますます人間理性の絶対性を確信させてきたといつてよい。こうして神は死に、自然は人間によって蹂躪じゅうりゃんされ、無視されてしまったのである。

これに対して、②東洋の思想はいかなるものかを検討してみる必要があるだろう。そこでの一つの大きな特徴は、自己は宇宙・自然の中の一員であるという考え方にある。人間、あるいは自分は他のすべてのものと同列にあり、自己に魂があるとすれば、他のすべての存在物にも霊が宿っているとみる考え方である。西洋においても、プラトンやアリストテレス以前には、そのような考え方が一般であったといわれているが、日本古来の思想はその③シキサイがとくに強く、自然との共存、共生ということが何らの不自然さもなく、今日にまで引き継がれてきており、④西欧思想に染めあげられた今日の日本人にとつても、いまだにしごくとうぜんのように感じられるのである。その根底には、仏教の哲学思想という人識はつきのうちの意識、無意識のさらに一段底に位置づけられる、

⑤アーラヤ識の考え方が⑥ヒソんでいるのではないだろうか。これは、すべての人間の魂に通底して存在するものであるだけでなく、他の生きとし生けるもの、さらには地球上のすべてのものの内部に共通して存在する何物かである、という考え方もみることができる。釈迦が入滅するときに、釈迦につかえた人々だけでなく、ゾウやヘビ、トラなど、たくさんの生物が集まってきて嘆き悲しんだとされているが、これはそのような何物かがすべてのものに通底して存在するという思想のあらわれだろう。ユングの普遍的無意識はアーラヤ識に近い考え方ではあるが、人間世界にしか視野が存在しないという点で、西洋思想の限界は超えられないわけである。

このような共生という考え方は大切である。共生である以上、自分が大切な存在であれば自分のとなりにいる人たち、自分をとりまく事物もまたすべて同じく大切なのである。したがって、人が食べたりして消費してしまうものにおいても、それを大切にし、自分にとって必要最低限度で満足する、という考え方もなるのである。

こういった視点、ものの考え方は、少なくともデカルト以後の西欧思想にはない。西欧の自然科学は外界世界を対象とはしているが、それはあくまでも人間理性の分析的活動の対象として、要素にまでばらばらに⑦カイタイされる生命力のない A であり、日本人のように、対象をその機能をも含めた生きた B としてながめ、

それが私たちと同列の仲間であり、また場合によつては、魂をもった私たちのあがめるべき C であるといったものの考え方ではない。そういった意味で、西欧の思想の根底には、人間・自己というものがつねに中心的存在としてあり、他はすべて自分の外側に位置する客観的対象として、一段も二段も下に存在するわけである。人間が自然と感情を共有する、といった考え方はないのである。したがって、日本人における自然への感情移入と、西欧人におけるそれとは、大きな⑧ヘタたりがあるといわざるをえない。⑨自分を空にするということは、日本人のもつ特色であろう。このような東洋、あるいは日本の思想は、二一世紀において重要になると考えられる。

※八識：仏教の唯識説が説く八つの意識作用

※ユング：一八七五年～一九六一年。スイスの精神医学者

※デカルト：一五九六年～一六五〇年。フランスの哲学者、数学者。「近代哲学の父」と言われる

問一 波線部①～④のカタカナを漢字に漢字をひらがなに直して答えなさい

問二 傍線部①の説明として、文中の内容と合致しないものを次から一つ選び記号で答えなさい。

ア いかなる動物、植物も人間と同様に大切な存在である。

イ 人間の通常の意識下にも重層的な霊的領域が存在する。

ウ 人間は魂を持ち、世界の中心に位置する存在である。

エ 人間を含むすべての生命に共通するものが存在する。

オ 宇宙や世界のすべての存在物には魂が宿っている。

問三 傍線部②の特徴を説明した一文を抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問四 傍線部③の内容を説明している箇所を、文中より二十五字以内で抜き出して答えなさい。

問五

A

C

 に入る語句をそれぞれ次から選び記号で答えなさい。

ア 総体 イ 周辺 ウ 主体 エ 客体 オ 対象

問六 傍線部④はどういうことか。十五字以内で説明しなさい。(句読点を含む)